

ウズベキスタン共和国における伝統文化の保護

——ユネスコ無形文化遺産・ナウルズの事例を中心に——

斎藤 完

Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage in the Republic of Uzbekistan

SAITO Mitsuru

(Received September 25, 2015)

ナウルズとは春の到来を祝う祭りである。この習慣は中央アジアを中心に多くの国々で共有されており、ユネスコ無形文化遺産への登録は、アゼルバイジャン、インド、イラン、ウズベキスタン、キルギスタン、トルコ、パキスタンと、国家の枠を超えたかたちでおこなわれた。2009年に登録申請時に提出された「無形文化遺産の代表的な一覧表への記載についての提案書（レファランス番号00282）Nomination for Inscription on the Representative List in 2009 (Reference No. 00282)」(以下、「提案書」)ではナウルズは次のように説明されている。

ナウルズは新年であり春の始まりとされる3月21日に祝われる。儀式や典礼や文化的イベントが家族や共同体でおこなわれる。伝統的な遊びや特別な食事や自然への敬意や音楽や舞踊や文学的な口頭表現や工芸品や絵画の傑作（とくにミニチュア）がある。平和と連帯の価値、再会と近所づきあい、文化的多様性と寛容さ、健康なライフスタイルと新しい生活環境がこの文化的イベントを通じて促進され、世代から世代に受け継がれている。儀式を遂行し伝統的知を若い世代に伝えることでは、女性が中心的な役割を果たす。これは国家による文化的アイデンティティの一部であり、それを増強するものでもある。

本稿は文献、ならびに2015年3月17日から23日にかけて首都タシケントでおこなった現地調査に基づき、ウズベキスタン共和国における無形文化遺産、とりわけナウルズの保護に関する諸相を報告するものである。

参照する基本文献は「提案書」である。「提案書」は上記七ヶ国に概ね共通することが記されているのだが、その記述の中心は以下のとおりである。

2. 当該要素の特定と定義 Description of the element
3. 認知及び認識の確保並びに対話の奨励への貢献 Contribution to ensuring visibility and awareness and to encouraging dialogue
4. 保護措置 Safeguarding measures
5. 推薦過程における社会の参画、同意 Community involvement and consent

本稿が着目するのは「4. 保護措置」だが、なかでも「4.a 当該要素を保護するための近年の取組み Current and recent efforts to safeguard the element (以下、「近年の取組み」)」に焦点を当てる。「近年の取組み」の欄に書かれている事柄をあえて分類すると、「組織的な保護措置」、「保護に貢献すると考えられる実践」、「個別事例 (キルギスタン、イラン)」となる。報告の対象となるのはおのずと前二者だが、「組織的な保護措置」はウズベキスタン共和国ユネスコ国内委員会が作成した「事例報告：ウズベキスタン共和国 Case Study Report: Republic of Uzbekistan」(以下、「事例報告」)によって、そして「保護に貢献すると考えられる実践」は現地調査の結果によって補うことで、その諸相を具体的に明示したい。

A. 組織的な保護措置

「事例報告」は「2003年ユネスコ無形文化遺産の保護に関する条約」にウズベキスタンが加盟した2008年4月29日以降における、同国での文化遺産(とくに無形文化遺産)に対する保護措置の進捗状況に関する報告である。同文書は翌2009年7月に日本で開催された「無形文化遺産保護のための集団研修 Training Course for Safeguarding of Intangible Cultural Heritage」において配布されたものであり、条約加盟後から約1年の動きを記載したものとなっている。なお、冒頭に示した「提案書」は2009年9月から10月にかけて開かれた無形文化遺産の保護に関する政府間委員会に提出されたものである。

以下、ナウルズに直接的あるいは間接的に関わる事柄を見ていきたい。

①無形文化遺産の保護・促進に関する法律の改正

2008年9月から12月にかけて、下院議会が「ウズベキスタンにおける文化の保護と活用 Safeguarding and Utilization of Cultural Objects of Uzbekistan」に関する法律を改正するために、専門家による委員会を数回にわたり召集した。改正された法律は2009年1月に下院を通過し、上院によって承認された。

上院は2008年12月から2009年5月にかけて、新しい「文化遺産に関する国家計画 State Programme on Cultural Heritage」を作成する目的で、専門家による委員会を数回にわたり召集した。計画において対象となっている無形文化遺産は、口頭伝承・口頭表現、舞台芸術、社会的営みや儀礼や祭り、自然に関する知識や実践、伝統工芸などである。さらに、上院は「文化遺産」の語を含むすべての法律を見直すことをはじめた。

②非政府組織(NGO)や民間団体や共同体による無形文化遺産の保護、ならびに伝承

全国規模のNGOとして、マハッラ Makhalla 財団、オルティン・メロス Oltin Meros 財団、セン・ヨルギズ・エマッサン Sen Yolgiz Emassan 財団、ウズベキスタン文化・芸術フォーラム財団、カモロト Kamolot 青年社会運動、フナルマンド Hunarmand 協会、作曲家連盟、ウズベクラクス Uzbekraqs 協会が挙げられている。

共同体として強調されているのが、マハッラである。マハッラとは町を地区に細分化した単位であるが、「一般的に、相互扶助と互酬性のネットワークが張り巡らされた生活の中心であり、ある程度の自治が行なわれ、教育や信仰実践のための設備が備わった一種自律的な社会(菊田 61)」と考えられている。「事例報告」によると全国に8449のマハッ

ラがあり、ウズベキスタン国内各地で開かれるフェスティバルではマハッラ間でコンテストがおこなわれている。またマハッラでの活動に政府組織・非政府組織が活発に参加している。

③学術的研究

無形文化遺産の目録作成に必要な学術的研究が、ウズベキスタン科学アカデミー the Academy of Sciences of Uzbekistan のナヴォイ言語研究所 Navoi Institute of Literature and Language と芸術研究所 Institute of Fine Arts、国立タシケント文化研究所 Tashkent State Institute of Culture、国立ウズベキスタン芸術研究所 Uzbekistan State Institute of Arts、ウズベキスタン国立音楽院 Uzbekistan State Conservatoire などによっておこなわれた。

文化スポーツ省によって設立された専門家で構成されるワーキング・グループが、ウズベキスタンにおける無形文化遺産をアイデンティファイするために、分野横断的な学術研究を遂行した。

④教育

上記の「文化遺産に関する国家計画」には、中学校以上の教育機関で無形文化遺産に関する教育をカリキュラムに組み込むことが盛り込まれている。

また、公教育ではないが、文部省が管轄する施設には5200のクラブがあり、そこでは無形文化遺産が学ばれている。その成果は子ども民俗フェスティバル Kids' Folklore Festival や子ども伝統遊戯フェスティバル Kids' Traditional Games Festival などの文部省主催のイベントで毎年発表されている。

B. 保護に貢献すると考えられる実践

「提案書」に記されている保護に貢献すると考えられる実践①②③のうち、現地調査で確認できた事柄を写真とともに明示したい。

- ①ナウルーズ休暇に合わせて官民間問わずボーナスが支給され、人々はナウルーズを祝うのに必要な物品（祝いの食卓に必要な食品など）や贈り物などを購入する。市場や商店は活気づき、それがまた祝賀ムードを盛り上げる。これに合わせて商店は店を飾り立てる。



【写真1】



【写真2】

写真1と2は市場の入口である。午後3時頃ということもあってか、市場が人で混雑するということにはなかったが、入口にはナウルーズを祝う看板が掲げられ、祝賀の雰囲気を演出していた（写真1：チョルス市場、2015/03/18撮影）（写真2：アライ市場、2015/03/19撮影）。



【写真3】



【写真4】

市場の一角ではスマラックというナウルーズで食される伝統料理（菓子）を売る場が設けられていた（写真3。チョルス市場にて。斜め正面に置かれている大鍋に入れているのがスマラック。2015/03/18撮影）。スマラックは麦芽を一日かけて煮込んで作ったジャムのような食べ物である。これは「提案書」記載の「祝いの食卓に必要な食品」に該当し、家庭で作るのが一般的とされるが、市場でも売られている。また、ナウルーズ当日のスーパーマーケットでは、店で作ったスマラックを無料で配布していた（写真4：スーパーマーケット「コルズィンカ」。2015/03/21撮影）。



【写真5】



【写真6】

市場の女性（写真3）が掲げている箱に収められているのが麦芽で、この新芽が春の訪れを象徴しているようだ。写真5のようにディスプレイされ（世界言語大学 Jahon Tillari Universiteti。2015/3/20撮影）、写真6のようにナウルズを表現する絵の題材にもなる（東洋学大学 Sharq Shunoslik Instituti。2015/3/20撮影）。



【写真7】



【写真8】

「提案書」では祝賀ムードの盛り上がりの一環として、「商店は店を飾り立てる」としているが、飾り立てるのは店だけではない。たとえばスーパーマーケットでは店員が伝統的な晴れ着に身を包んで接客をしていた。写真7がナウルズ当日（2015/03/21撮影）、そして写真8はナウルズの翌日（2015/03/22撮影）の写真である（いずれもスーパーマーケット「コルズィンカ」）。



【写真9】



【写真10】

音楽も盛り上がり的一端を担っている。ショッピングセンターでは、カルナイやスルナイやドイラなどで構成された楽団が店の入口でにぎやかな演奏を披露し、道行く人々の足を止めていた（写真9：ショッピングセンター「オルズ」の入り口で演奏する楽団。看板には「ナウルズ」の文字がある。2015/03/22撮影）。ちなみに店内では伝統工芸品を展示販売するコーナーが設けられており、ここでは多くの人々でにぎわっていた（写真10：伝統的織物「スザニ」の展示即売コーナー。2015/03/22撮影）。

②地方自治体が街を飾り立てる。



【写真11】ナヴォイ通り



【写真12】



【写真13】



【写真14】

タシケント市の大通りにはナウルーズを祝う看板が至る所で立てられていた（写真11：トルキスタン・コンサート・ホール正面玄関前。2015/3/21撮影）。看板は大通りに面している大きな建物の壁面（写真12：ナヴォイ公園近くのビル。2015/3/18撮影）や、広場のフェンス（写真13：イスティクラール広場。2015/3/18撮影）などにも見られた。看板以外にも、色とりどりの旗（赤、白、青、ピンク、黄緑、黄色など）が設置され、街中に華やかな印象を与えている（写真14：ナヴォイ公園入口。2015/3/21撮影）。

③政府高官がナウルーズ関連の祝典に参加する。



【写真15】

ウズベキスタンではナウルーズを祝う国家的祝典が野外ステージで開かれるのが恒例になっている。伝統的な歌舞のみならず、「ウズベク・ポップ」的なポピュラー音楽や西洋クラシック（2015年ではオペラ歌手による《フニクリフニクラ》など）などが、（多くの場合）群舞を伴って披露されていた。

この祝典に参加できるのは政府要人と招待客に限られているが、その一部始終は国営放送によって何度も放送されるため、ウズベキスタン国民はこれに接する機会をもっている。

ナウルーズの翌日はイスラーム・カリモフ大統領が同祝典でおこなった演説が、新聞各紙の一面を飾っていた（写真15は『プラヴダ・ヴォストロカ』紙の一面。2015/03/22朝刊。これ以外に収集することができた二紙においても同じ写真が一面に掲載されていた）。

C. まとめ

以上のように、「組織的な保護措置」「保護に貢献すると考えられる実践」のいずれの面においても、ウズベキスタン共和国における無形文化遺産（ナウルズ）は積極的に保護されていることが伺えた。

今後は、こうしたナウルズの全体像を踏まえたうえで、観察のポイントを一点に絞った調査をおこない報告することを考えている。

【付記】本研究は科学研究費補助金・基盤研究（B）「中央ユーラシアにおける探検隊考古資料を活用した無形文化遺産の保存伝承研究（2013年～2017年、研究代表者：鶴島三壽）」の成果の一部である。

参考文献：

菊田悠 2003 『ウズベキスタンの聖者崇敬—陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』東京：風響社。

小松久男ほか編 2005 『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社。

ダダバエラ、ティムール 2008 『社会主義後のウズベキスタン』千葉：アジア経済研究所。

Intergovernmental Committee for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage. (2009). “Nomination for Inscription on the Representative List in 2009 (Reference No. 00282)” Abu Dhabi, United Arab Emirates.

National Commission of the Republic of Uzbekistan for UNESCO. (2009). “Case Study Report: Republic of Uzbekistan” Asia/Pacific Centre for UNESCO (ACCU).